

アイランドキャンパス事業実施報告書

種子島と沖縄の交流史



令和2年1月10日～1月13日

名桜大学国際学群  
屋良健一郎

## 1. 事業のねらい

沖縄から種子島に行くためには、鹿児島へ移動し、そこから飛行機か船に乗る必要がある。沖縄・鹿児島間の飛行機は1日2便であり、そのこともあって、現在、沖縄と種子島との距離は遠いようにも感じられる。しかし、歴史を紐解くと、種子島を統治していた種子島氏は、中世には日本最南端の領主として琉球王国の版図と勢力範囲を接しており、近世期には薩摩藩家老として琉球との交渉を担っていた時期がある。歴史的に見ると、種子島と沖縄とは意外と深い関わりがあったように思う。

本事業のテーマを「種子島と沖縄の交流史」と設定したのは、両地域の歴史的なつながりを知り、それを発信することで今後の両地域の交流の活発化につなげることができたらとの思いからである。

## 2. 実施期間・場所

令和2年1月10日（金）から13日（月）にかけて鹿児島県西之表市に宿泊し、3泊4日で事業を実施した。

## 3. 参加者

参加者は以下の6名であった。

高杉寅太郎（名桜大学国際学群4年）

久高莉代（名桜大学国際学群3年）

鍛田利久（名桜大学国際学群3年）

東恩納健（名桜大学国際学群3年）

真喜屋亜衣里（名桜大学国際学群3年）

屋良健一郎（名桜大学国際学群上級准教授）

## 4. 実施概要

### （1）1日目（1月10日）

午前の便で那覇空港から鹿児島空港へ、そこから乗り継いで種子島空港へ渡った。レンタカーを利用し、西之表市へ移動、昼食後に種子島開発総合センター「鉄砲館」を訪れた。

鉄砲館の展示を見学し、種子島の歴史・文化の概要を学んだ。その後、同館が所蔵する近世期の史料を閲覧した。

### （2）2日目（1月11日）

午前は庄司浦公民館において、庄司浦在住の方々から同地区に伝わるヨンシー踊りについて話をうかがった。

午後は西之表市内の史跡を見学した。港を中心に巡り、種子島と海との関わりについて学んだ。月窓亭を訪れ、夕方からは栖林神社で行われている大的始めを一時間ほど見学した。

### (3) 3日目 (1月12日)

午前10時から12時まで、種子島開発センター「鉄砲館」において発表会「種子島と琉球の交流史」を実施した。種子島を訪れる前に事前学習を行っており、そこで調べたことをベースとしつつ、現地を訪れて知ったことや感じたことを取り入れた発表を行った。

屋良が中世・近世の種子島と琉球との交流について解説し、東恩納が『種子島家譜』所収の琉球から種子島氏への書状を紹介した。鍬田と高杉は、種子島・琉球間を往来したモノに着目し、それぞれサツマイモと昆布の歴史について発表した。真喜屋と久高は種子島の芸能に着目し、チクテンとヨンシー踊りについて発表した。

午後は島内の史跡を巡り、夕方からは日典寺の温坐祈念を一時間ほど見学した。

### (4) 4日目 (1月13日)

午前7時より本源寺の温坐祈念を見学した。見学後は同寺の住職のお話を聞くことができた。その後、島内の史跡を巡りながら種子島空港に向かい、同空港から鹿児島空港を経由して沖縄へ帰着した。

## 5. 事業を通しての学び・成果

鉄砲館では「種子島譜」をはじめとする近世期の史料を閲覧したが、数百年前の史料を目の前で見るとするのは学生達にとって非常に貴重な経験となった。また、短い時間ではあったが、「御文書有物套」という史料を閲覧しながら翻刻も行った。このように史料の現物を前に、史料の内容を読み解くというのは、普段の名桜大学の講義では行う機会がほとんどないことである。

また、種子島の郷土芸能であるヨンシー踊りについて地元の方々から話しを聞くことができたのも有意義であった。国頭サバクイという沖縄の芸能が種子島に伝わり、ヨンシー踊りとして独自の変化を遂げていることを知ることができた。ヨンシー踊りは古文書等に登場するわけではなく、文献で近世期の実態を解明することは不可能である。そのため、実際に現在踊られているものを見たり、踊り手の人達の話の聞いたりすることが重要となる。文献調査だけではなく、聞き取りも実施できたことで、今回のフィールドワークが豊かなものとなった。

今回、種子島を訪れる前の事前学習および種子島での活動により、種子島と沖縄の交流の歴史をふたつの側面で捉えることができた。ひとつは、「種子島家譜」などの近世期の史料から見える、種子島氏と琉球国王・琉球士族との交流である。そしてもうひとつが、ヨンシー踊りに垣間見える庶民たちの交流である。近世期には、薩摩・琉球間を往来する船として薩摩領内の船が活用された。その中には種子島の船も含まれていた。そのような船や船員たちの活動が史料に表われることは多くないが、ヨンシー踊りが当時の交流を想像させてくれる。

「種子島家譜」などの文献が伝える交流は種子島と沖縄の交流のごく一部でしかない。文献には出て来ないが、両地域に多くの交流の時間があったことを、ヨンシー踊りは教えてくれる。

引率教員の屋良は種子島の歴史を研究対象としており、これまで何度も種子島を訪れたことがあるが、学生達は今回が初めての訪問であった。今回、種子島を舞台にフィールド

ワークを行ったことで、学生達はフィールドワークの楽しさと、種子島の歴史・文化の豊かさを知ったようである。また、種子島と沖縄との交流の歴史を知ったことで、種子島という地域を身近なものとして感じるようになったようだ。

なお、1月12日に行われた発表会については、『南日本新聞』2020年1月30日「地域総合」面に掲載された。



庄司浦公民館にて、ヨンシー踊りの衣装を着て

## 6. 課題

今回、大学の授業期間中の実施となったため、種子島への滞在時間が3泊4日しかとれず、やや慌ただしいスケジュールとなってしまった。種子島の歴史・文化を学ぶには短い時間であり、もう少し長く滞在期間を設定すべきであった。

また、事前の準備学習も充分だったとは言えない。事前学習をしっかりし、現地で調査すべきことをより明確にすることで、さらに深い学びができたであろう。

短い時間と事前学習の不十分により、学びの内容に限界はあったかもしれないが、種子島の人達との交流を通して、種子島を身近なものと感じ、地域の歴史・文化を学ぶことの楽しさや奥深さにふれるきっかけとなる貴重な機会であったことは間違いない。

## 7. 謝辞

今回、本事業を実施するにあたって、八板俊輔市長をはじめ西之表市役所の皆さまから多大なるご支援をいただいた。歴史文化活用係の柳田さゆりさん、荒河翼さんには様々な面においてご助言・ご協力いただいた。ヨンシー踊保存会および庄司浦の皆さま、種子島開発総合センター「鉄砲館」や月窓亭の皆さまにも大変お世話になった。深く御礼申し上げたい。また、このような貴重な機会を与えてくださった鹿児島県離島振興協議会にも感謝申し上げます。

